



# 無理はせず、日常の延長から向き合う防災教育

神戸学院大学 人文学部 准教授 **船木 伸江**さん

9月1日は、防災の日です。そして今年も、東北を中心とする大きな震災に見舞われ、今もなお、大変な思いをしている方が多くおられます。そこで今回は、かつて阪神・淡路大震災で大きな被害のあった神戸の地を拠点に、防災教育に取り組んでおられる船木伸江先生に、現在の防災教育のあり方や日常で必要な意識などについて、様々なお話をいただきました。

## 昨今の防災教育と意識づけのための教材作り

昔と今では防災教育も大きく変化しているのでしょうか。

防災教育は、昔と今とを比べても違いますが、地域によって、学校によっても大きく異なります。時間をかけて防災教育を受けてきた子とそうでない子があります。

地域や学校によってそれぞれのやり方で、防災教育はなされていますが、地域によって災害も様々です。また、

現状では、全国統一の防災教育のカリキュラムはありません。内容は様々ですが、ほぼすべての学校で行っているのは、避難訓練プログラムだと思います。9月1日の防災の日前後に行われることが多いです。

しかし、阪神・淡路大震災が起こった神戸では、1月が防災月間になっている学校が多く、「あの日」のことを忘れず、しっかり防災を考えましょうという風潮があります。おそらく、今後は東北地方では、3月11日が忘れられない日になると思います。

## ふなきのぶえ

広島県出身。1999年、神戸学院大学人文学部卒業。2001年、北アリゾナ大学大学院教育心理学専攻修士課程修了。

その後、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターの震災資料専門員などを務める。京都大学大学院情報学専攻博士後期課程にて単位取得退学。現在は、神戸学院大学人文学部准教授として、学際教育機構防災・社会貢献ユニットにて教鞭を執る。著書に『夢みる防災教育』（共著/晃洋書房）などがある。



防災教育のための教材に、神戸学院大学の学生が作られたものもあるのだとか。

当校で作った教材は、たくさんありますよ。学生が考え、絵なども学生が描いた。カードで学ぶ非常持出袋もそのうちのひとつです。

これは、「非常持出袋に何を入れますか」と問いかける、カードゲーム形式の教材で、数ある候補アイテムの中から、9個を選んでもらうというもの。表には絵が、裏には説明が書いてあります。カードの種類は、懐中電灯、電

池水、手袋、ラジオ、ライター、ゲーム、現金、通帳、非常食、指輪、写真、下着、救急箱、タオル、ラップ、ビニール袋、化粧品などと様々で、さらに、任意のものを加えられるスペシャルカード（裏は白紙）が1枚入っています。基本的にはグループで考えてもらう教材です。

持出袋に入れる数を制限しているのは、重さという問題があるからです。袋に何をを入れるかは、冬と夏でも違います。幼児がいる家庭とない家庭でも違います。家族単位での「正解」を見つけてほしいですが、少なくとも、全国共通で、どの家庭でも同じ「正解」というものはありません。同じアイテムでも、人によって、家族によって重要度は異なります。例えば、都会では、水や食べものは全員が選ぶように思うけれど、以前ものすこい田舎のほうでやった時には、「湧き水が飲めるから」と言っただけで水を外した人もいたくらいです。

また、カードに化粧品がある理由は、阪神・淡路大震災の時に、亡くなった人に対して棺桶すらない状況で、「せめて化粧だけでもしてあげたかった」という話を、学生が耳にしたこと

が理由です。生死を分けるときに必要なかといわれればわからないけれど、「何もしてあげられなかった」とずっと悔やむ人がいたということも知ってほしかったからと、そんな選択肢も作られました。

実際、災害時にはいろいろなきことが起こるので、その時々で判断しなくてはいけなくなります。

近年の震災を経験して変わってきたのは、防災教育が、正解を教えるものではなくてきたことです。ケースバイケースで「判断」しなくてはならないということを教えずにはなりません。だからこそ、このようなゲームを使って、みんなでワイワイ言いながら試行錯誤してアイデアを出しながらやってみることも大切です。ひとりの意見だと限定的ですが、みんなの意見から学べることもありますよね。

大切なのは全員が参加することです。この教材は、アイテムカードの数が多いため、発言機会が多くなります。いろいろ考えるとどれも大切なもの。どんなことが起こるのか、イメージしながら本当に必要なものを考えてほしいですね。

どうしてこのような教材を作られたのですか。

学校の先生に、気軽にやってもらえるものを作りたいなと思って。学校現場って、すごく忙しいんです。もちろん、防災の授業のための時間もありません。だから、いかに先生の負担を減らせるかが重要だと思いました。

この教材は、日常で防災を学べるようにと思って考えられたもので、一応、家庭科用の教材として考案しました。家庭科の学習指導要領には、「日常を振り返って自分たちの生活を支えているものを知ること」を学ぶ、と書かれています。災害時は非日常です。その非日常を考えることこそ、日常私たちの生活を支えているものを知ることにつながると思っています。

#### 『カードで学ぶ非常持出袋』



神戸学院大学の学生が考えた教材。非常持出袋の中身の代表例36個の中から、自分たちに必要だと思うものを9個だけ選んでオリジナルの非常持出袋を作成する。

## 災害に対しての備えは無理せず日常の延長で

実際の災害への備えとしては、どのようなことが必要でしょうか。

ひとつ質問ですが、ご家庭に、持出袋を用意しておられますか？

今、よく自治体などで、「3日分の物を用意しましょう」と言いますよねでも、実際には、用意している家は多くありません。3日分を実際に持ち出して運べるのが、3日分で大丈夫なのか、という問題もあります。

しかも非常食やアルファ米などは、結構価格が高いですね。全部それで用意しようと思うと出費がかさみます。だから、普段食べるものの中で考えて少し多めに買っておくほうがベター、ということもあるかもしれません。「よし、やろっ」と意気込みすぎると大変です。しかし、普段から水を少し多めに買っておくだけでも、ひとつの備えにはなります。わざわざ非常食やアルファ米を買っていなくても、少し賞味期限の長い物を買って置いておくだけでも随分違います。こういったのは、考え方ひとつですから。

また、ある物に必要な物を作り出す知恵を備えておくことも大切です。

財団法人市民防災研究所が考えた、サラタ油とアルミ缶、アルミホイール、ティッシュペーパーで作る「防災用コンロ」はその例です。これは、ガスや電気が停止してもご飯が炊ける優れものです。作り方はWEBにも公開されていますが、用意するのは、ビールなどの缶と、芯を作るためのアルミホイールとティッシュ、サラタ油のみ。計量カップも作れます。料理はもちろん、暖をとることもできる上、重ねてコンバクトに置けるので、ご家庭で作ってみてほしいグッズでもあります。

### 防災用コンロ



材料は350mlアルミ缶、アルミホイール、ティッシュペーパー、サラタ油  
作り方は財団法人市民防災研究所  
<http://www.sbk.or.jp/idea/idea.html#cookstove>をご覧ください。

## 正解を定めることより考えてみるのが重要

何が本当に必要かというのは、なかなか難しいですね。

要は、考えてみるのが大切なのです。いかに災害時のことが想像できるかどうかですね。実際のところ、何かしらの対策をしている人はいませんが、まだまだ少ないのが現状です。他人事のように思っただけでも、次、起こるのは、自分の住む地域がもしも、だからこそ、意識しておかなければ、考えておかなければいけないのです。起こってほしくないけれど、災害はいつどこで起こるか分からないものですから。

私たちが、「防災教育」として行っているのは、考えるためのきっかけ作りですね。気付いた時にやってみることが大切なのです。災害の記憶はどうしてもすぐ風化してしまうもの。だからこそ、できるだけ考える時間を作りたいのです。

当校の学生が出向いて小学校などで行う出前授業では、災害時をいかにして想像してもらえるかを意識していま



す。何でもある日常をベースに考えるのと、何もない非日常を前提で考えるのでは違います。その非日常をイメージしてもらったため、災害時の写真を見てもらったり、話をしたりします。そうして災害時を考えてみれば、同じように現金を用意していても、1万円札だけでは役立たない可能性も思い当たります。公衆電話で電話をかけるためには小銭、10円玉も用意しておかなくてはいけません。テレフォンカードは、電気が通っていないと使えません。

さらに、最近は公衆電話そのものが少ないので、探すのも大変です。病院や学校などに行けばあるけれど、その他、思いつく場所がありますか？ 常日頃から、公衆電話がどこにあるのかを意識しておくことも大切ですね。こういうことを普段から知っておけば、災害時に役立ちます。

避難所の場所もそうです。自分たちがどこに避難するのかを把握しておくことは大切です。災害は家族一団の時に起きるわけではありません。家族バラバラの時に災害に遭う可能性もあるのですから、みんなで話しておく必

要もあるでしょう。

防災に対するアプローチの仕方はいろいろあります。ゲーム形式の防災教材は、ある程度、楽しみながらできるものですが、一方で、家族を亡くされた語り部の方の話を聞くような防災教育もあります。それが楽しいかという、もちろんそうではありませんよね。楽しいことでは全然ないけれど、自らの体験を次の世代に伝えたい、という語り部の方の思いが子どもたちの心に響きます。そこには知識だけではない防災に向かう心を育ててくれます。

ただ、普段から備えておこうと思っ  
ていても、それが続けられないようではどうしようもないので、子どもたちには、できるだけ楽しい方法も提案したいと思っています。

では、家庭でできることは、どんなことがあるでしょうか。

ちよつとした意識の積み重ねが、緊急時の力になります。例えば、買い物ついでに避難所や防災施設に目を止めて話題にするだけでも違います。

防災は、特別なことではなくて、どこからでもアプローチできる、日常の

延長線上にあるものです。こうして意識し、身につけた知識や経験は万が一の時に役立つことはもちろん、その意識を今度はお子さんが、次の世代に伝えていくこともできるわけです。防災教育教材作りに携わった卒業生は、教育、企業、行政……と様々な分野で「防災」をテーマに活動しています。ひとりの意識が、家庭、地域を安心して暮らせる場所にしていくのです。

防災対策は、どんどん変わっていきます。防災は、過去の災害から学ぶというのが基本なので、今回の震災で不十分な対策があったとわかれば、そこからまた学ぶのです。その点、子どもは大人よりも柔軟ですから、きつかけさえ与えてあげれば、時代にあつた案を生み出してくれる、と思います。大切なのは、親が子ども防災の芽を摘んでしまわないことです。避難勧告が出て「大丈夫だから、なんて言っただけで逃げないとか、「どうせ大丈夫」という意識はいけません。まずは、そういう意識を、捨ててください。その上で、気負わず防災と向き合ってくださいと思います。